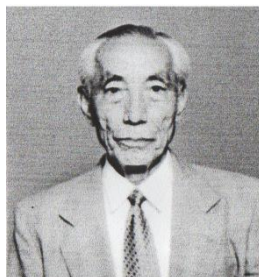


軍歌航空百日祭 作曲の経緯



家弓 正矢
55期航空
(本庄市)

(1) 作曲の募集・応募

昭和16年4月航空55期が3分科（操縦、技術、通信）に別れ、後期教育が始まった頃、自治生徒会が出来ました。「記念アルバム」の編集や「留魂録」の作成等先輩各期でも行なって来た作業を推進するのが目的ですが、新規の企画として、「航空百日祭を実行する事」「其の時に合唱する作詞、作曲を生徒から募集する事」等が決まり告示されました。

作詞は7月末に〆切となり「梅岡信明」作の『航空百日祭』と「作者失念」『航空55期歌』が採用され、生徒会では作曲の募集を始めましたが応募者無しでした。

私も積極的には応募しなかったのですが、たまたま、生徒会会長「今村誠一」は私と同じ技術中隊、同区隊、寝台戦友であった為「貴様なら何とか作曲出来るだろうから頼む」と要請されました。

纏まった歌曲の作曲は、初めてなので最初は自信無かったのですが、「今村誠一」の両三の要請に快諾しました。そこで意を決し、新たに作詞を見なおしました。

「望めば遙か纏漣の 七洋すべて気と飲みて」 御存知、軍歌航空百日祭の歌い出しです。此の句に触れたとき頭の中をズシーンと走ったメロディーが、切っ掛けとなって後に続く歌詞のメロディーを組みた

てて行きました。最初は自信の無かった私が何とか纏め上げられたのは、「梅岡信明」の作詞文の素晴らしさに魅せられ、牽引され、意欲が湧き上がって来た御蔭です。8月末でした。

(2)「私の作曲法」に就いての質問事項に対する回答

前項で作曲の経緯は簡単に終りにしても良いのですが、私が出席した諸会合で軍歌演習の度に、「音楽の設備も書物も無い士官学校で如何やって作曲が出来たのか?」「楽器を使わない素手で作曲が出来るのか?」等の質問を受けますので、以下私の自叙伝みたいで恐縮ですが、「素手で作曲出来た経緯」を述べます。

私は幼稚園の頃からピアノに興味があり、母の実家に行っては、祖母に手を添えてもらって、「シロジニアカクヒノマルソメテ」「オテテツナイデ」等童謡を1本指で弾きまくっていました。

其の内に「声を出して唄える曲」はキーを探って自分一人で弾ける様になりました。音を聞いて其のキーの位置が解り始めたのです。更に小学校1年～3年の担任が音楽専攻の先生で小学唱歌を歌うにも、楽譜を解りやすく解説して教えられました。国語の時間に歌詞が出てくると、音楽の時間で無いのに「此の詞の曲を自分で作って唄える人は唄え」と即興作曲まがいの練習をやらされました。之が作曲の始まりでした。

家ではハーモニカに夢中になりました。

此頃市販のハーモニカ楽譜は算用数字1234567でドレミファソラシの音階を示し、オクターブの上下は記号(・)を数字の上下に、長さの長短は(一)(二)記号を数字の下に付けて8分音符、16分音符、記号無しが4分音符を示し、休符、区切り等もありました。

自分で楽譜を求め小学唱歌を吹きまくりました。其の甲斐有って、メロディーを覚えるとハーモニカもメクラ吹きが出来るようになり、歌曲を聞くと自分のハーモニカの音程になおした音階が自然に取れました。

小学4年生のころ妹がピアノを自宅で習い始めたので、其の隙を借りて、ピアノ楽譜による童謡の独学練習に励みました。

以上の過程で私の演奏、歌唱の能力は他の生徒に比しては上位となりました。

学芸会では、2年生でオルガンの童謡片手弾き独奏、3年生でハーモニカの小学唱歌独奏、4年生で小学唱歌独唱に出演させられました。正に音楽マニアの少年でした。

併し乍ら満州事変等で故郷鹿児島では軍国主義も芽生えが早く、軍人志望は小学校頃から盛んになり正式にピアノ等のレッスンを受ける事は親に反対され、自然と音楽の道から遠ざかり、中学1年から広島幼年学校に入学してしまいました。

所が、広島幼年学校40期は復活新校の1期であり教養学科として音楽の授業がありました(幼年学校では、唱歌は正課の授業)。教官は隣接女学校の教諭でした。授業の内容は、殆ど楽譜による歌(軍歌は校歌のみでしたが其の他は一般の中学唱歌、戦時歌謡曲等)の練習でした。

幼年校の後期には独仏露の3語学の授業に関連した、各国の国歌、国民歌等も原語で唄う練習も有りました。

[通信などに音感教育も必要だ]とピアノのキーを叩いて、音階を当てさせる授業等もあり、得意でした。皆の前で校歌のピアノ独奏をさせられたり、音楽好きの血が少しは燃えました。生徒集会所にはピアノが置いてあり、休日には弾く事が出来たのも嬉しかった思い出です。

広幼同期の「今村誠一」が「貴様なら何とか作曲出来るだろうから頼む」と私に作曲を要請したのも、前述の事を知って居たからでしょう。

以上で私は楽器が無くも、歌のメロディーを想像したり歌ったりすれば、音符に変える事ができた事はお解りでしょう。但し素人ですから、和音やコード等伴奏を付ける編曲はまだやった事がありません。

(3)「航空百日祭」の作曲と譜面化、新曲の軍歌指導方法

「航空百日祭」の作曲は、詩句を読む度にイメージが湧いて来て口ずさんで見ましたが、8月末の日曜日に、歌詞と手帳、鉛筆を持ち、誰も居ない入間川の川原で外出時間一杯掛けて全曲想を繰り上げ記録しました。譜面は5線紙等が無いので、手帳に、前述したハーモニカ向けの算用数字1234567と記号で書きとめて唄いながらトライアンドエラーを続け、何とか自分なりに

に納得の行く曲を纏めました。

当時、航空士官学校の伝統(50期以来の5年間ですが)として軍歌演習のテンポは速足行進のテンポ(114歩/毎分)の1/2ぐらいの、遅いテンポで唄われて居ました。営内靴をぞろぞろ引きすって悠揚迫らずの唄い方が魅力的でした。それに合わせてスローテンポ向けに仕上げた積りです。

早速「今村誠一」に聞かせて承諾を受け採用されました。百日祭の日程は17年3月末卒業の100日前(16年12月20日)前後なので、それまでに軍歌普及演習を同期各中、区隊毎に行う事になりました。

先ず自分の区隊に歌唱指導をする事になりましたが、譜面を配布するにはゼロックス如き複写機の無い当時、生徒会で出来るプリントはガリ版刷りのみ、5線紙に写した譜面は自分持ちの手書き1~2枚しか無いので、譜面配布せず、総べて口伝にする事になりました。

「八巻明彦氏(61期)」が御自分で監修された「終戦50周年記念軍歌集：雄叫」の序文にも記述された通り、「口伝軍歌は少しずつ詠って伝えられ易い」ので、航空百日祭も原曲とは違う部分が数個所有ります。此の違いの多くは、同期55期に普及指導した初期から詠って唄われた部分が多く、皆に唄い易く修正されたのだと思い、納得して居ます。

多くの方々に歌い継がただけで嬉しく、有り難く、誇りに思っています。

最後に終戦前3ヶ月に戦没して、只今此の嬉しさ、有り難さを天国で喜んで居る、作詞者「梅岡信明」の英霊に深甚の黙祷を捧げます！！！！に

(4) 付記

私がこの文書の投稿を要請されたのは去る6月12日埼玉偕行会歌唱会の席上です。本文(2)項に述べた質問を受け、同じく本文に書いてある内容を説明していた所、埼玉60機関誌「秩父」に軍歌「航空百日祭」の「誕生の経緯」を投稿して欲しいとの御要望が有り、承諾しました。

当初は作詞の経緯も記述する積りでした。作詞者「梅岡信明」、特に其の「文才の素晴らしさ」と「人格の高邁さ」を紹介しようと、「航空士官学校史」55期生会で刊

行した「烈星の頌（巻4）」、「端午の群像」等調べているうちに、上記資料の抜粋を此の文中に記述するのは、意を尽くせない虞も有ると思ひ割愛しました。御希望の方は、偕行社で御閲読下さい。